

「シベリアからの葉書」

鳥取県 天 農 幸 義

昭和二十二年夏の暑い日、米子市に住む天農晴治さん宅の郵便箱に、官製はがきとは違う紙質のはがきが投函されていた。晴治さんは奇異に思つて表を見ると、横文字の中に、日本文字で「俘虜用郵便葉書」とあるのが目に止まった。宛名は鳥根県亀嵩村、天農幸一様である。幸一は本家の親父だかと思ひながら発信人を見ると、ソ連ウラジオストック郵便局郵便箱二ノ八〇四天農幸義とある。やっと事態が飲み込めた。ソ連に抑留されている本家の息子から親父宛のはがきが迷い込んだとわかつて驚いた。早速、幸一が国鉄職員だったのを思い出し、その筋から山陰線大山口駅に勤務中をつきとめて、早速はがきは親父の手に渡った。終戦後、全く消息不明の中、突然降つて湧いたこのはがきの一件は、親類をも巻き込んで大騒ぎになったとか、

復員後、何度も聞かされた話です。

南千島択捉島独歩第二九五大隊の小隊長として勤務中終戦、ソ連軍の武装解除を受け、大隊長以下全員、船でソ連沿海州のワニナ港に上陸、抑留生活の第一歩であった。皆が交わす言葉もなく、不安な目を見交わす状態だった。

時に昭和二十年九月二十三日の夜明けだった。自動小銃を抱えたソ連兵の監視誘導に従い、山道を樹林の奥へと隊列は進んだ。昼ごろ、山林が開けた山腹に有刺鉄線で囲われた幾棟かのバラックが建ち並ぶ収容所に着いた。

地面に尻をおろし携帯していた乾パンで昼食をしながら、これから幾年続くかわからない抑留生活への不安をささやき合っていた。三十分ほど経過したところ、一目で将校とわかる軍服を着た軍人が六人、部隊長のところに現れて全員を整列させた。一人の将校が通訳を通じて、自分が所長であり、スタッフに軍医一人、作業監督指導に将校三人が当たることを紹介した後、この収容所の任務は、建築要材の伐採搬出、作業をし

やすくするため、作業隊の編成は従来の部隊編成を認め部隊長に一任する。ソ連では労働の対価として食糧が配給される仕組みなので、作業ノルマは必ず達成すること等、日本式でいえば所長訓示を聞かされた。

早速、炊事班が編成され、夕食の準備、宿舎や寝床も決まり、身辺整理も終わり、ひとまず落ち着いた。一片の黒パンと水のようなスープで夕食を終わった。だれも余り口もきかない重苦しい空気の中、眠れないシベリアでの第一夜であった。

私は、伐採の第三班編成を指示され、十組（一組三名）担当することになった。

監督の現地指導が始まったが、お互い言葉が通じないこともあって、やたらに監督がどなる。作業手順は樹木を切り倒し、枝打ちして六メートルの要材にきざむ。六メートル未満の残材はまき材として三メートルにきざむ、枝葉は全部焼却、要材の末口に直径を墨入れる。一日一人のノルマは三立方メートルであった。ノルマに明け暮れる一日が長い強制労働が始まった。吐く息が眉毛に氷結する酷寒の中での労働は、体力

の消耗に追い打ちをかけた。

シベリアに来て二度目の冬もどうにか越えた昭和二十二年六月だったと思う。ある日曜日、休業で朝から雨だった。朝食後、皆が思い思い休息しているとき、所長が宿舎に姿を見せた。通訳を介して笑顔で話出した。

「皆によい知らせがある。日本の家族に便りを送ることを許可する。ただし、日付、地名、作業の内容等は記入しないこと、検閲して不適当なものは焼却する。住所はソ連ウラジオストク郵便局郵便箱二ノ八〇四と記入する」等を説明し、はがきを支給して帰って行った。

舎内はざわめいた。本当にこのはがきが家族に届くとはだれも信じなかった。私も半信半疑で、それでも思い書くことにした。頭の中で書いては消し、消しては書き、やっと夜になって書きあげた。

拙文を紹介する。（はがきは全文片仮名）

「拝啓、やせたれども病に非らず。又と無き長き修養道場なりと心得、目下腹を練りつつあり、万事ご心

配なく。おきき下さいこの元気な笑声を「アッハハ」では帰れる日まで、暗い手製のランプの光で、食い気一方色気なしの若武者 幸義より」

昭和二十三年九月十七日、ナホトカから舞鶴に復員、帰宅して親父からこのはがきを渡されたとき、目を疑うほどの驚きでした。

毎年八月十五日が来るとこのはがきが、あの苦しかった抑留生活を励まし合い、助け合った同僚たちへの感謝と思い出の縁になっています。

「語り合って眠った友は、

朝起きたら冷たくなっていた」

広島県 増川 寛爾

◎今日は忙しいところ、ご苦勞さまです。最初働かされたのはどこでしたか、これから約三十分ぐらいの間をお借りして、当時の様子を聞かせてください。

私は増川です。

東京ダモイにだまされながら、約千人の大部隊が十か月ほど引き廻されて、ある町に入りました。

◎それは、何という町でしたか。

ウオロシロフという、炭坑町です。

◎これから、その炭坑の様子を聞かせていただきますが、途中十か月も歩かれたようですが、みんな元気でしたか。

それが行軍の途中、疲労のため、落伍者が続出、その人たちがどのようなようになったかわかりません。何しろ私自身、歩くのが精一杯でしたし、到着しても身体を動かすのがやっとでした。

◎で、到着されたところの施設は、増川さん等をどんなに受け入れてくれましたか。

それがとんだ施設で、何しろ、三重の有刺鉄線の柵の中に入れられ、四方のやぐらから、自動小銃を持った兵隊が見張っているんです。

虎の檻の中へ追い込んだようなものです。

◎私が収容されていた、カラカンダーのラーゲルも同じようでしたよ。それからどうしましたラーゲルは。